

算命学中庸

【初年】 6 2 回目

6 2 回目の授業はこのページからです。

授業科目 【宿命と健康】

【初年】 6 2 回目 【宿命と健康】 01

□ 宿命と健康 (しゅくめいとけんこう)

人間はいったいどこからきて、どこへ向かうのでしょうか。

私たちが、此の世こに生まれて来るということには、
どのような意義があるのでしょうか。

どのような目的があるのでしょうか。

これからの記述は、あくまでも算命学で考えている内容ですので、異論があっても当然だと、個人的にはおもっています。

☞ 算命学は、自分が生まれたのは「宇宙が必要としているから生まれてきた」と考えています。

世の中が自分を必要としているから、家族が必要としているから、自分の家系が必要としているから、親が必要としているから……これらの理由で子供が生まれて来ることはない。と考えているのです。

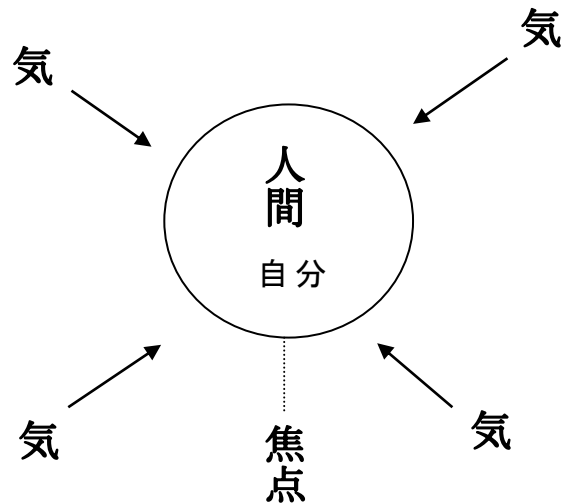
子供が生まれて来るには、両親の存在があるわけですから、その意味では親も入るわけです。

そして、必要としなくなった人間は、此の世に存在できない。とも考えています。

この説には納得できない部分があると思いますし、
どうちょう
同調できない方もいらっしゃるでしょう。

再度申しあげますが、算命学の考え方です。

算命学の基本的考え方は、人間の存在は「^き気の^{しょうてん}焦点」
であるとしています。



宇宙空間における地球の存在は、太陽系宇宙のなかの惑星に「気の焦点」であり、それで地球が誕生したと考えているようです。

参考・同調 [自分の意見を一致させること]

参考・焦点 [レンズを透して入ってきた光線が集まる点]

算命学では、いくつかの惑星があつて、その惑星の遠心力のバランスのなかに焦点があり、そこに地球が必然的に現れたと考えているのです。

その「気」を大別すると……地球があつて、地球を取り巻く天空（宇宙）があります。

宇宙を取り巻く気は「天気」であり、地球を取り巻く気は（地気）であるとしています。

宇宙

宇宙を取り巻く気が「天気」

天空

地球

地球を取り巻く気が「地気」

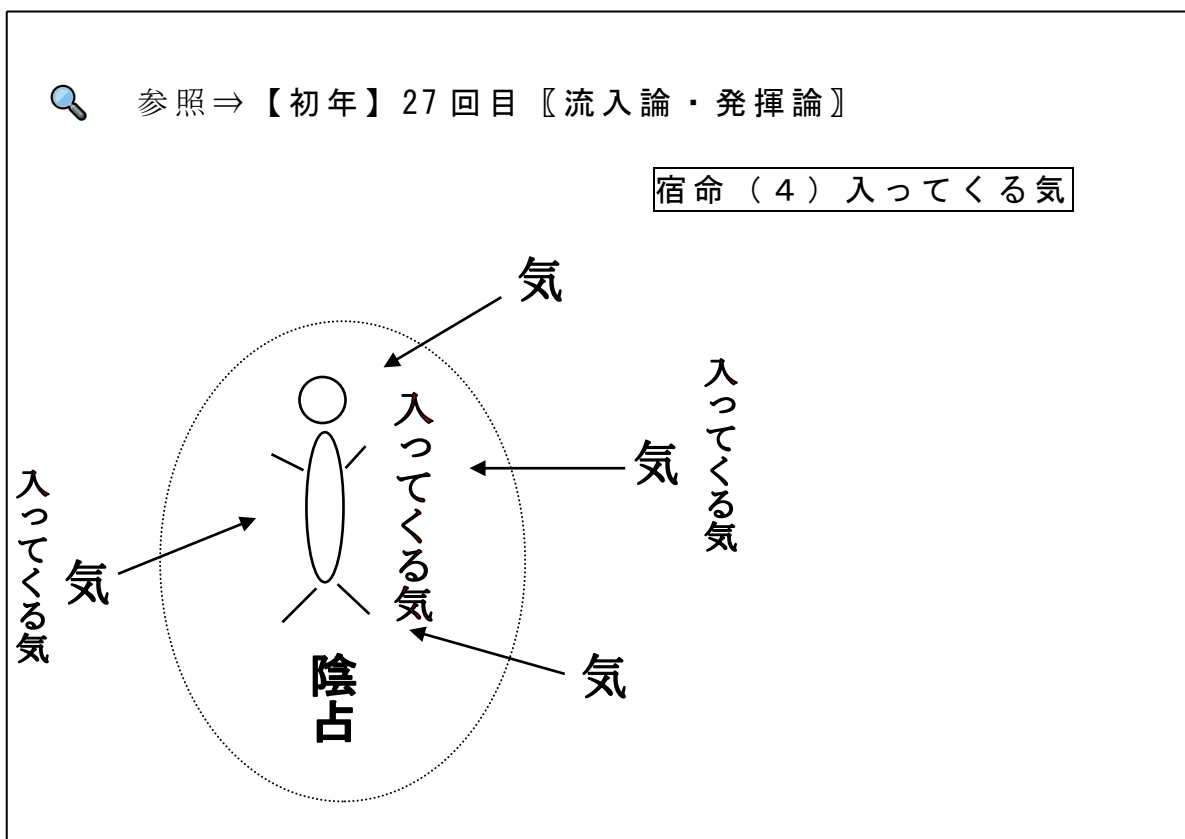
天気を分析したものが十干であり、地気を分析したものが十二支です。

それゆえに、「干支」に生年月日を^あて^は嵌めるのは、自分に与えられた天気と地気を知ることなのです。

日 月 年
干 干 干
支 支 支

三柱は自分に与えられた天気と地気
を知ることである

干支そのものの存在は人氣（じんき）ではありません。
干支をただ並べてだけでは、人氣ではないのです。
地球上に人間が誕生する（生まれる）と同時に、天気
と地気の両方の気が入ってきて、人氣という人間の
気を生じます。それは生年月日で表されます。
そして「陰占の宿命」として、この人物は、このよ
うな干支をもっているということになるわけです。



その日に生まれた、その人の生年月日を干支で読むとき、それが人気です。

〔たとえば〕2000年1月1日に生まれた人に、天気と地気が入って、人気となり、^{さんちゆう}三柱で宿命を表します。

「年干支」「月干支」「日干支」を1人の人物とするとき、それが「気の焦点」なのです。

それゆえに、人間は『小宇宙』という言い方ができるわけです。

太陽系は太陽を中心として、九つの惑星と、ほかの微小天体から構成されています。

地球は仲間の惑星とともに太陽系の一員です。

人間は太陽系のなかの地球という惑星で、生命維持活動をしていますから、地球上が『地』であって、宇宙空間は『天』になります。

宇宙や地球がないとすれば、私たちの生命はないはずでず。

大宇宙の存在があって、人間が地球という場で生活しています。

それゆえに、人間は宇宙空間では、地球を中心としてものを考えているわけです。

天気も地気も地球を中心として考えます。

そうしますと、地球の地気と天気との関係についてですが、^{てんきかこう} 天気下降と^{ちきじょうしょう} 地気上昇のなかにあります。

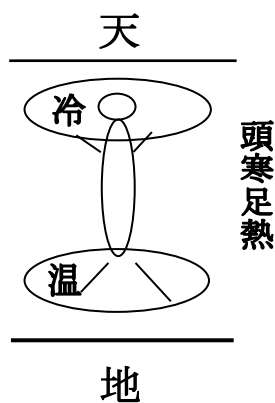
「天気下降」

「地気上昇」

万物の発生は天気下降、地気上昇のなかにあると、中国ではいわれていたそうです。
このことは頭寒足熱とも関連しています。



参照⇒【初年】 5 回目【生剋比論】 07 宿命（8）



この話を天と地というふうに分けます。

地面が温められると、水分が上昇します。

水分が上に昇って行くと、寒いので氷の粒になります。粒になると重いので落ちてきて、

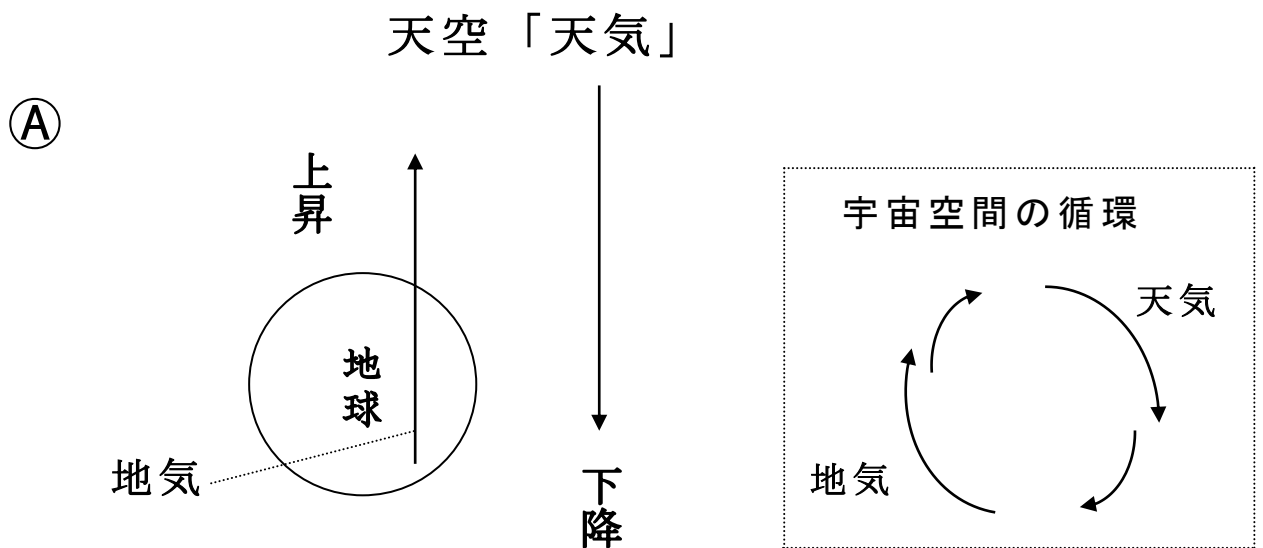
また、温められると上昇し、上空で冷却されて落ちてきます。

人間が病気になるということは、自分のもっている「気」のバランスが崩れるのも一つの要因です。

自分に与えられた気が、自分の宿命どおりに動いていけば病気にならないと考えているのです。

天気（陽）と地気（陰）があって、地気は上昇し、天気は下降するということは、地球上で繰り返されていることです。

この状態が一人ひとりの人間のなかで、行われているという考え方です。



天気が下降して、地気が上昇するという循環は、宇宙空間で、絶えず行われているわけです。

天気は陽の気が集積したものであると考えていまして、万物の発生の根源であります。

地気は陰の気が集積したものであるとして、発育の根本であるとしています。

天気と地気が調和することで、生命を発生させ維持していると考えています。

参考・発育〔発生成育すること〕

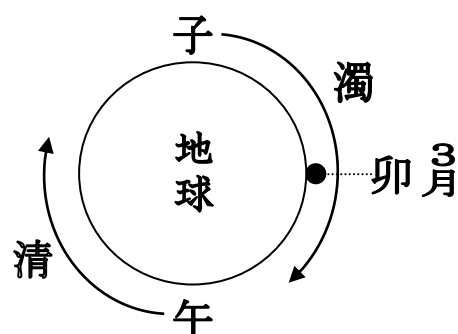
人間も小宇宙であるから、人間自身も天気と地気を備えているので、^{そな}身体のなかで、天気と地気が循環していると考えています。

天気（陽気）は熱であり、極限に達すると、一転して陰気を生ずる。陰気に転じると寒を生ずる。

地気（陰気）は寒であり、極限に達すると、一転して陽気を生ずる。陽気に転じると熱を生ずる。

②

冬至 (北) 真冬



夏至 (南) 真夏

⑥は、地球上における、宇宙空間の『気』との関係を考えると、寒（陰気）の頂点に達して、そこから一転して熱が生じてきます。

熱は（午）へ向かって、だんだんと最高になっていきます。

夏至げしに至ると、熱は頂点いたに達して、そこから一転して寒を生じていきます。

（3月であれば、卯月ですから、丁度、子と卯の中間のあたりに位置します）

1年の気の動きのなかでは、

冬至と夏至が（陰気）と（陽気）の境さかいになります。これが1年の話です。

陰気は（子）冬至で 頂点に達します。

陽気は（午）夏至で 頂点に達します。

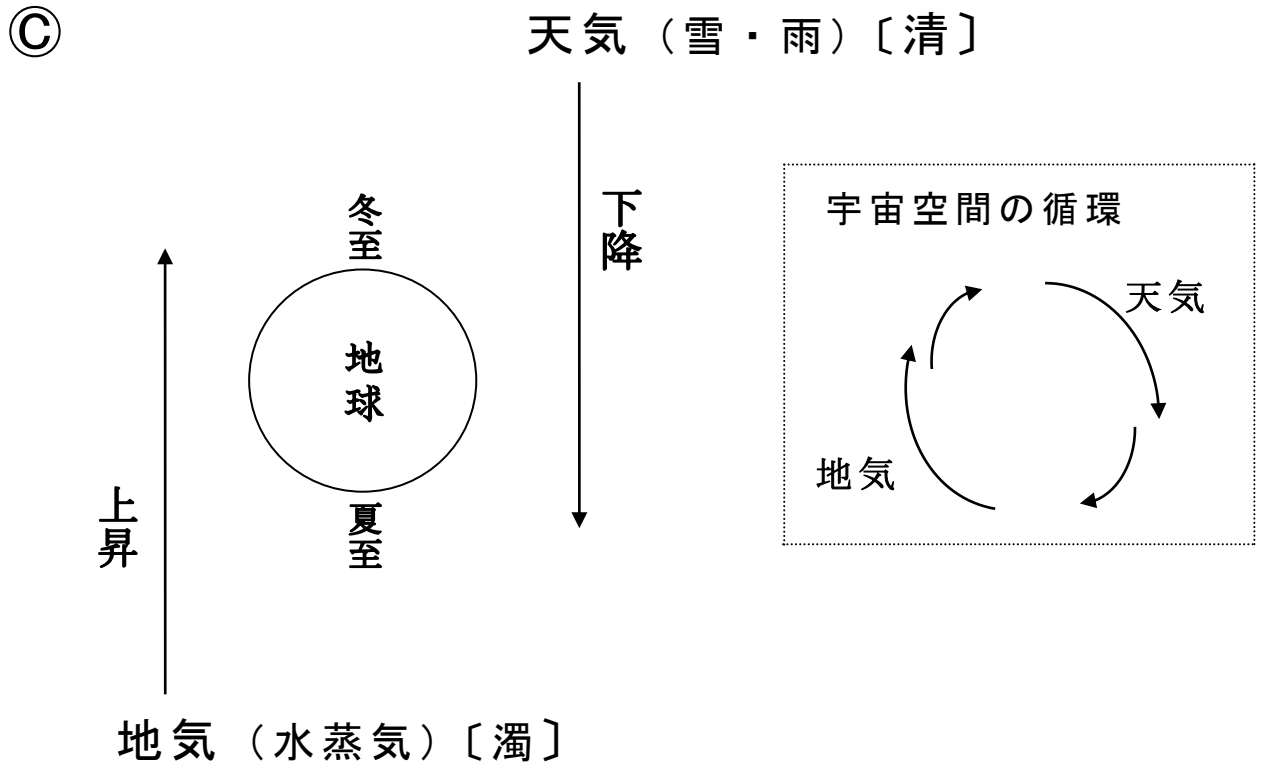
夏至を過ぎると、一転して、冬至へと向かって……

寒を生じます。そうすると同時に〔濁だく〕を生じます。

逆に、冬至から、一転して陽に転じると、熱を生じて〔清せい〕を生じます。

この循環を、天気と地気に合わせて考えます ➡

この循環を、もう一度、天気と地気を合わせて考えます。⇒ ㉓



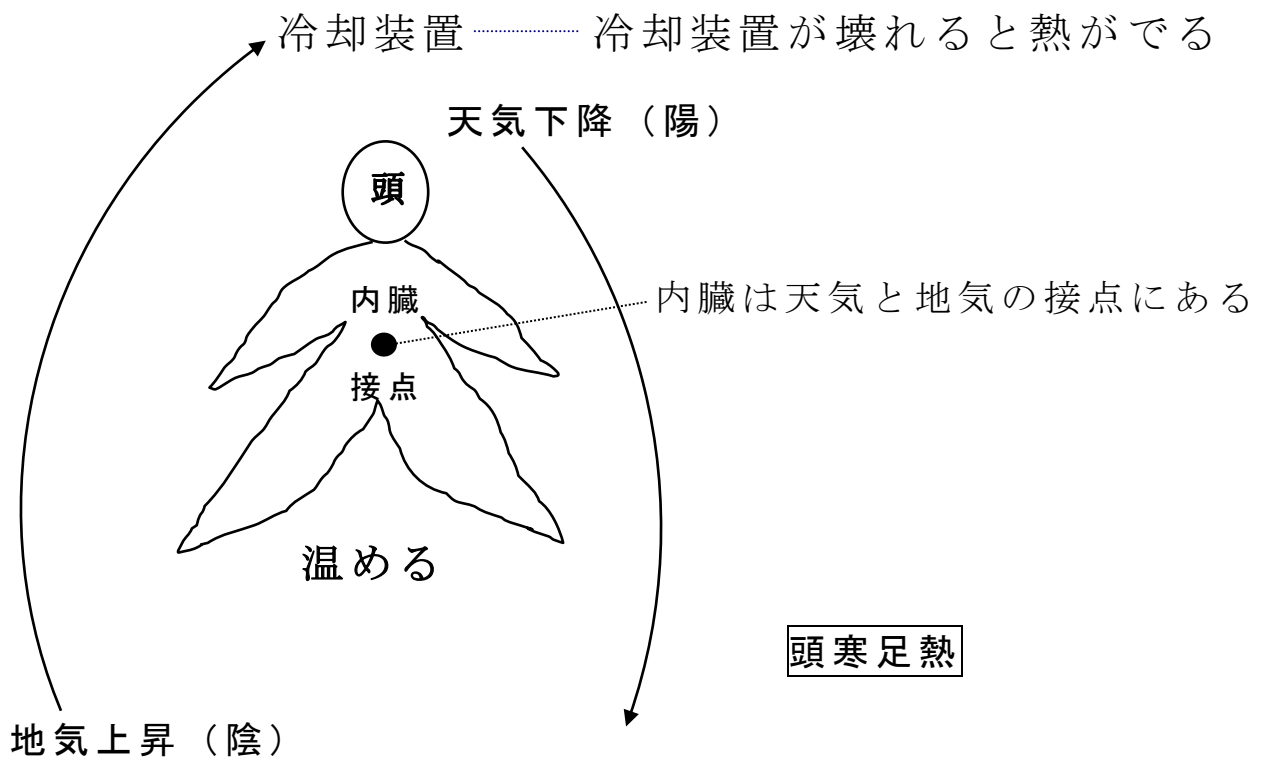
地気が上昇して、天気が下降するという循環になります。

この原理が「天気下降 [清]」と「地気上昇 [濁]」です。この循環の仕組みが、人間の体内でも行なわれていると考えています。

㉔の図は、季節の変化で行われていて、考え方はおなじですが、その循環の仕組みは㉓とは違います。ようするに、地上で温められた「地気」が上昇して、

天で冷やされて「天気」になって下がってくるということになります。

宇宙空間のこの仕組みが、人間の身体の中で行われていて、宿命と人体という話があるのです。



足から地気が上昇して、頭に上がった気が下降する
と考えていますから、頭は冷やさなければ駄目です。
足は温めなければ駄目ですね。

冷え性の方は、循環のリズムが狂っていると考えら
れます。

地気（陰）と 天気（陽）、その陰陽の接点は内蔵でありまして、地気上昇と天気下降がうまくいかないと内蔵に問題がでます。

頭は冷却装置としての役割ですが、循環がうまくいかないとクーラーが壊れるので熱が出ます。

熱が出ると氷枕で頭を冷やすという考え方です。

風邪を引いて熱が出たら、頭を冷やして、足を温めることで、気の循環を調整しようとするわけです。

頭の中から下りてくる気が〔清〕をもたらし、足から昇る地気が〔濁〕をもたらすと考えています。

天気（陽）は、発育の根源であり、そこに問題が起こります。

（頭 → 足）への天気の下降が狂ってくると、養育に問題が出ます。

地気（陰）は、養育であり、しゅうれん収斂（収縮）作用であると考えています。

地気上昇に問題がでると、収斂に問題がでて、けっこう血行の巡りに問題がでます。（足 → 頭）

血流の循環に問題が出るということは、異常に太るとか、異常に痩せるとかにもなるでしょう。

頭が疲れてくると、自分の冷却機能が壊れます。
 体温を正常に保つには、頭と足の血行循環です。
 足が疲れてくると、加熱機能が弱くなります。
 ここが壊れると病気の原点になり、風邪をひくのか、
 お腹を壊すとかの兆候が現れ、そのまま放っておく
 と内蔵が傷みます。その延長にはガンもあり得ます。

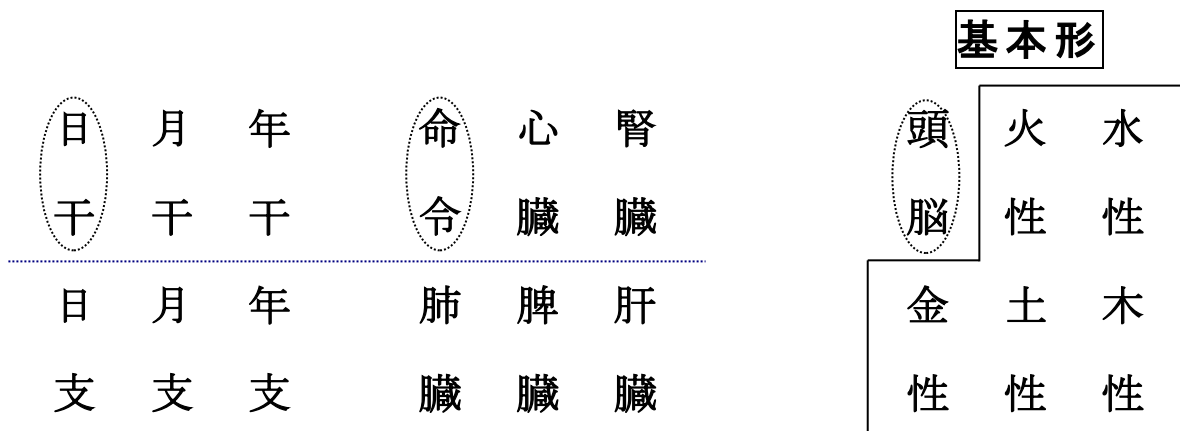
⇒ 内蔵は五臓で、天気と地気の接点にあります。

五行 ⇒ 木性 火性 土性 金性 水性

五臓 ⇒ 肝臓 心臓 脾臓 肺臓 腎臓

人間の病気は身体を壊します ⇒ 陰占の世界

「日干」は何もないですが、頭脳（司令塔）を統率する場所です。



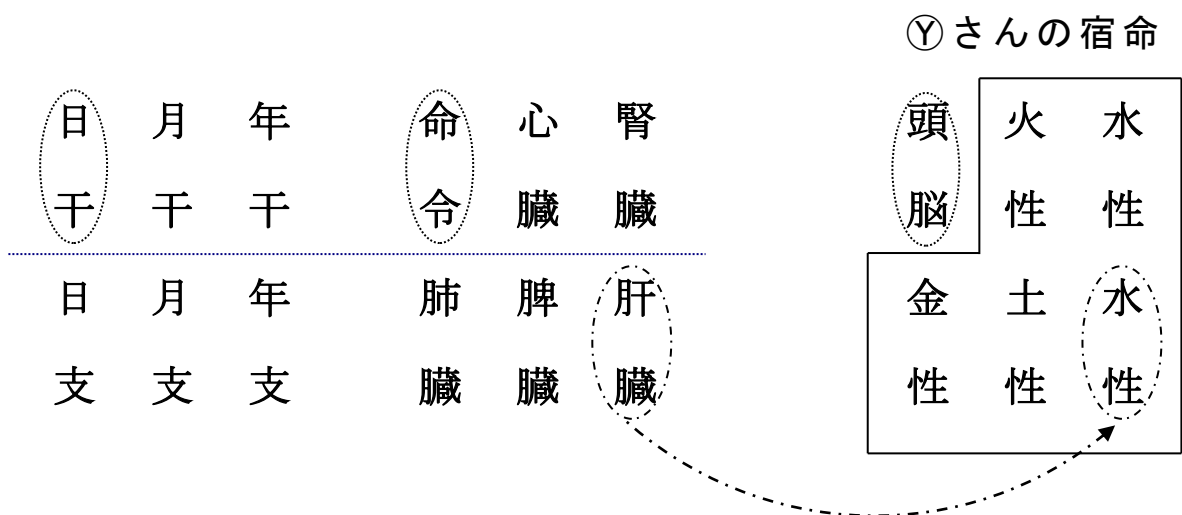
肝臓の悪い人は年支の具合が悪く、酒を飲みすぎると肝臓（年支）がやられます。

五臓が正常でない人は、頭の指令が狂ってきます。知的作用が狂ってくると、正常な判断ができなくなり、詐欺などの被害にも遭いやすくなるでしょう。

〔たとえば〕 ㊦さんの（年支）が木性はでなくて、水性があれば、肝臓の場所に腎臓があることになり、それは肝臓の働きを腎臓が補うことになるために、腎臓の負担が重くなるということです。

水がいっぱいある人は、腎臓の負担がそれだけ重くなります。

1つで2役も3役もこなさなければならぬためです。



☞ 個人の宿命、つまり干支では、腎臓の場所に腎臓がないのが普通です。

* 逸見政孝 1945 (S20) 2-16

逸見太郎・逸見愛の父親

[1993-12-25 内蔵すべてガン・48歳没]

	丙	戊	乙		玉堂星	天極星	8 丁丑
戌	寅	寅	酉	龍高星	龍高星	司祿星	18 丙子
亥	戊	戊		天貴星	鳳閣星	天貴星	28 乙亥
	丙	丙					38 甲戌
	甲	甲	辛				48 癸酉
							58 壬申

○	心 火	腎 水	} 基本形
金 肺	土 脾	木 肝	

丙	戊	乙	○	脾 土	肝 木	⇒ 天氣
寅	寅	酉	木 肝	木 肝	金 肺	⇒ 地氣

五行 ⇒ (木3) (火0) (土1) (金1) (水0)

五行のなかで、1つの気が多いと、そこが欠点になります。また何もなくても、そこが病気になる質をもつという話がありました。

逸見さんの場合は、肝臓が腎臓の場所にあり、肝臓の場所に肺臓があります。肝臓が腎臓と脾臓の二役を担うことひぞうにな

なりますから、負担が大きくなります。

また、水性（腎臓）が宿命にありません。

火性（心臓）もないです。無いのは欠点です。

心臓を働かすのは脾臓なので、脾臓の負担が大きいことになります。

腎臓を働かすのも肝臓ですから、肝臓の負担が大きくなります。そうしますと、脾臓・肝臓に気をつけないと身体を壊します。

宿命に無いのも欠点ですが、有りすぎて欠点になります。

肺臓（金性）は、肝臓（木性）の場所にあります、これは一つです。

最後まで残るのは肺臓で、肺臓に来たら死です。

☞ 「丙火」のある場所は司令塔ですから、臓器には含みません。

* 松田 優作 1950 (S24) 9-21 松田龍平・松田翔太の父親

1950-9-21 戸籍上の生年月日 [1989-11-6 没] 39 歳

	己	乙	庚		調舒星	天極星	6 丙戌
子	未	酉	寅	貫索星	鳳閣星	玉堂星	16 丁亥
丑	丁		戊	天南星	車騎星	天貴星	26 戊子
	乙		丙				36 庚寅
	己	辛	甲				46 辛卯

○	心 火	腎 水
金 肺	土 脾	木 肝

} 基本形

己	乙	庚	○	肝 木	肺 金	⇒ 天氣
未	酉	寅	土 脾	金 肺	木 肝	⇒ 地氣

五行 ⇒ (木 2) (火 0) (土 2) (金 2) (水 0)

肝臓の場所に肝臓があるので、肝臓はしっかりしています。肺臓が2つあるから、肺臓と肝臓の負担が大きくなります。自分の持っている臓器は本来1つしかないのですが、2つあるということは、役目を2箇所ではなくてはならないわけです。

間違えないでください。物理的には、肺臓が腎臓の役目ができるわけではありません。

肺臓が腎臓の代わりにをするとか、肝臓が心臓の代わりにをするとかを論じているではありません。

自分に無い臓器を、ほかの臓器が補助するために、その臓器にとって、役目が負担になるということをいっているのです。

そうしますと、松田さんの宿命に無い臓器は、腎臓と心臓ですから、これらは欠点になります。

五行のバランスが崩れて、調節できないということです。

肝臓だけはしっかりしていたので、最後まで残りますが、肝臓が傷んだときには、死ということです。

参考・調節〔ほどよくととのえること。釣り合いの取れるようにすること〕

逸見政孝さんと松田優作さんの干支で、死の^{いん}因を挙げましたが、実際にはほかの問題も抱えています。

人間は相当に討たれないと死なないのです。

⇒ 宇宙空間に天気があり、地気があり、地気が上昇して、天気が下降することによって、地球上の万物を誕生させる原点であると考えています。
そのなかには人間も含まれます。

生命の躍動^{やくどう}は、天気上昇、地気下降が必要であり、人間を小宇宙として考えていますから、人間個人のなかでも、おなじことが行われています。

天気が下降して、地気が上昇する。

その接点に内蔵があると考えています。

天気下降、地気上昇が順調に行われないと、内蔵が損傷する・壊れることになります。

壊れるという姿のなかで、1番軽いといえますか、その徴候が出るという状態は、風邪を引いた、お腹を壊したということです。

その症状がおさまったから、治癒^{ちゆ}したことはないのです。

一時的におさまったということであって、完治してはいないかもしれないわけです。もし、完治していなければ、病気は進行していくことになります。

風邪は万病の元といわれますように、どんな大病も

最初は風邪のような初期的兆候からきます。

風邪がおさまると、病気が治ったと勘違いする人がいますが、それを何回も繰り返している間に、実は内蔵がやられていたとか、ガンになっていたとか、
たいかてきしっかん
退化的疾患の問題が起り得るのです。

人によっては、手遅れになるということも考えられます。そして、診察したら「あなたはガン」です。

「あと三カ月の命です」といわれるような場合は、最初の初期段階で、何かしらの疾病しっぺいを生じて、それが治っていないからです。

風邪にりかん罹患して、熱をだすのは、体内の気の循環がうまくいっていないのです。

風邪を引く現象として、「足が冷える」「頭がのぼせる」「足が浮腫む」とか、それは地気上昇がうまくいかないということです。

「頭がボーッとする」というのも、天気下降がえんかつ円滑に
いっていないからです。

人間の内蔵は5つしかないので、一つやられたら、その人は健康で生きてはいけません。

びょうせん
病占は、内蔵を五行に置き換え、それとは別に干支を五臓に配置して考えていきます。

だいたい宿命には、おなじ干支がいくつもあるのは普通です。

また、宿命に五行をそろってもっていても、五行が所定の位置 基本形 に即していない、あるいは、無いということです。

自分の身体には内蔵が五つあるのに、宿命には内蔵が五つ出ていないのが普通です。

無いということは、ほかの臓器がその代わりをすると考えています。

逸見さんの日干は「丙火」ですから、司令塔の質は火性です。

松田さんの日干は「己土」ですから、司令塔の質は土性です。

風邪を治すには、自分の身体のなかに、地気上昇と天気下降が円滑・順調にいくようにすれば、風邪は治ります。

しかし、それが順調に循環していないのに、一旦は熱がおさまり、咳がおさまると、治ったと想うわけですが、実は治っていないのです。

さまざまな療法があるわけですが、気の循環という

ことで風邪を治す療法として、自分の足を温めて、頭を冷やして、循環させないと、風邪は治らないと考えているのです。

⇒ 身体は生命活動を維持するために、臓器を備えています。宿命中に特定の臓器の気が無いという場合は、その臓器が無いための欠点をもち、ほかの臓器に負担がかかるという欠点があります。

〔たとえば〕逸見さんの宿命には、心臓の気がないので、心臓に欠点が出て不思議ではないですね、という考え方です。

心臓に欠点が出る時、心臓の代わりに担うのはひぞう脾臓ですが、負担に耐えられなければ脾臓にも欠点が出て、心臓にも欠点が出るというように、連動していると考えています。

干支のうえで病気の原因を突き止めていくと、そのような姿になっているわけです。

それゆえに、逸見さんが脾臓を粗末にしていると、心臓に負担がかかってくるということであり、心臓の代役をしている脾臓のほうが、先に討たれることにもなるという考え方です。

「無いのも欠点」「有り過ぎるのも欠点」です。

逸見さんも、松田さんもそうですが、自分の宿命のバランスが取れていないところを観ることで、欠点がわかります。

算命学の考え方は、自分の宿命の欠点を知って、その欠陥けっかんに注意していけば、病気にはならないと考えています。

しかし、それ以前の問題も存在します。

臓器の問題だけではなく、地気上昇、天気下降というのが基本的にあるわけです。

むしろそのほうが大事であり、それが順調に働いていないと、いずれ臓器がやられてしまうということになります。

内蔵は陰陽の接点で存在しているという考え方があります。

〔100歳〕まで生きられる方は、自分の生き方のなかに病気に備える指針、自分なりの健康法というものをもっているといえるでしょう。

その人自身には、実施している健康法が良くても、それとおなじ方法が第三者の他人にも、効果がある

とはいえないのです。

つまり、人体は誰もがおなじではありません。

〔たとえば〕 100 歳の長寿の人が「私はこの健康法を実施してきたのよ」といっても、その方法がほかの人にも当て嵌あまるはとはいえないのです。

元気で生き生きと、健康で長生きしたい方は……、自分なりの健康法を、ご自身で編み出すことが必要といえます。

「病占びょうせん」は陰占の授業で学びます。

【初年】 6 2 回目【宿命と健康】 終わります

つぎの授業 ⇒ 【初年】 6 3 回目【天中殺の心得（1）】です。